

ブータン警見

小方全弘

平凡社発行の世界大百科事典によると、ブータンの最高峰はチョモラリと名づけている。首都はプーナカで人口は約三〇万、面積は約五五万平方キロという。この事典の発行されたのが一九五八年というから、ちょうど中尾佐助さんが戦後日本人として最初にブータン入りをした年でもある。

帰国後、中尾さんの書かれた「秘境ブータン」は、それまで全く露に包まれていたブータンをくわしく紹介してくれた。

クーラカンリやチョモラリの写真が紹介されたばかりでなく、それまでに耳馴れないギェウコンとかタカコンなどの名前が我々の前に現われた。

いま、世界でブータンについて書かれた本はほんの数えるほどでしかない。それだけでも中尾さんの「秘境ブータン」は稀少価値をもっている。のみならず、中尾さんの秀れた観察力がこの本をブータンに関する第一級のもの



この山もチョモラリの一峯?

と、ブータンの最高峰はギャンケブツムといわれている。この山がどんな山なのか、全くわかっていない。多分、七五〇〇メートルはないだろう。最も有名なチョモラリは、チャップマンによって登られていることになっている。私の見たチョモラリは五つあった。この五つにそれぞれの名前がついているのかどうかは最後までわからなかった。

大抵、ブータンには森林が多い。山に向って川を遡り、針葉樹林を抜けるとそこはもうアルプである。アルプはすぐ岩稜となって続きその上にはヒマ

のとき私は王妃から貸与された二人の兵士と二人の馬引き、それに一人のチエックポットの兵士とチエックポットの兵士の間では、チョモラリが近づいてたし、私がベースキャンプ附近で出逢ったヤクの放牧者たちのチョモラリはそないいずれともちがっていた。チョモラリという名前が「聖なる女神」という意味であることはよく知られていて、ブータンの人たちの意見も全く一致している。

だから私は始めのうち、高い山は全ったほどである。ブータンの人たちはチベット人ほどではないにしても、雪の山を尊いものとしている。それなのにチョモラリが一致しないのが私にとっては不思議であった。反対側から撮影されたチョモラリの写真を見るとチョモラリは判然としていた。しかしながらブータン側からのチョモラリは判然と識別し難い山となる。

これからはあらゆる障壁を越えてブータン入りを果たす日本人は多いことだろう。そしてその人たちの成功こそブータンへのパスポートになるだろう。

例えれば、バロからチョモラリへ登るために進行した川を私は最後まで「パロ・チエウ」だと思っていた。だが、この川ぞいに住む人たちは決して「パロ・チエウ」とはいわず「パ・チエウ」と呼んでいる。ブータンの山名、地名などなどの報告を読んでも完全に一致することはないのであろう。これらを一致させるためには、まだ相当の時間を必要とする。そしてそのためには、ブータンの人たちの対話が重要なことはいまでもない。そのブータンの人たちは礼儀正しく、人見知りをする。



昭和44年(1969年)

5月号 (No. 287)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

会員通信

- ブータン警見……………小方全弘… 1
正月の御堂平と王岳……………笠原藤七… 5
二王子岳春山スキー登山……………斎藤 桂… 6
チリ通信……………坂上秀太郎… 6
アフガン便り……………平井 剛… 6
フンザの情勢……………笠井芳郎… 2

海外情報

- アメリカのダウラギリ隊…………… 2
西部チュガチの登攀…………… 2
ヒンズー・クシュ 1968 …… 4
カラコルム情報…………… 7
カナダ山岳会のこと…………… 8
中部ヒンズー・クシュと
ワハシ情報…………… 8
スイス山岳会の現況…………… 9
奥国山岳協会と山岳会の区別…………… 9
潜り登山…………… 9

図書紹介

- カラコルムの夜明け…………… 10

追悼

- 近藤氏の思い出……………武田久吉… 7
磯野計蔵氏追悼会…………… 7

会務報告

- 常務評議員会…………… 10
ルーム日誌…………… 11
会員異動…………… 11
新入会員…………… 11

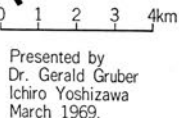
図書室便り

- 新刊図書受入れ…………… 10

ラヤがそびえている。だから、遠望のきかないことが、山を識別することを困難にさせている。さらにブータンにはこれといった地図もない。(あるいはあるのだからうが我々には入手できない)。

そして決定的な障壁はやはり言葉である。普通、ブータンではチベット語が通用すると思われるが、私も入国するまではそう思っていた。起源は疑う余地もなくチベット語系ではあるが、ブータン語は相当にちがう。もし私たちが正確なチベット語を使えば彼らにこちらのいうことは理解できる。だが、鹿兒島と秋田の言葉の差より、チベット語とブータン語の差の方が大きいようだ。

もしブータンで英語のできる人(これは意外に多い)に山の名前や川の名前をたづねると、おそらくたづねた人の持っている地図の名前で答えるだろう。首府のティンブリーやバロなどでは必ずしもそうした答えが返ってくるにちがいない。



A few mountain names and routes were added by the data from Dr. Adolf Diemberger.

A) Wakhan: Khandud Valley

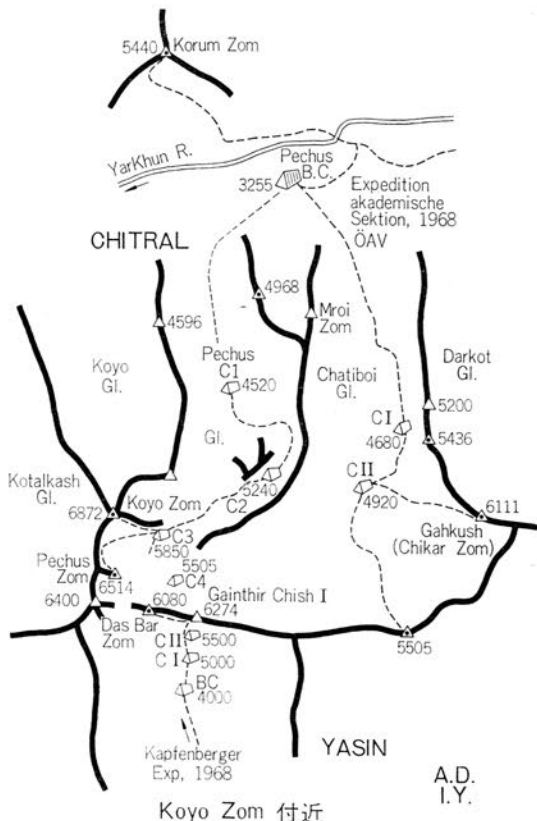
- B)** Wakhan: Khandud and Yalmit Vs.
3) Italy and Poland.

- (E)** Wakhan: Lakshn Datta

- 6) France (GHM, Lyonet Nice)
Louis Dubost.....
Kohle Lakhsh (5786 m)... 1
Pointe 5640 m..... 2
F) Chitral H.K.: (Kotgaz Gl.)
7) Sektion Rottenmann, ÖAV
Hans Gasner.....
Pegish Zom II (6167 m)... 1
Pegish Zom I (6269 m)... 1
Noghor Zom I (6000 m)
..... 1

- | | |
|------------------------------|---------|
| Noghor Zom II (279 Wala) | 1 |
| Chikar Zom (280 Wala, | |
| 5285 m) | 2 |
| G) Chitral H.K. (Kotgaz Gl.) | |
| 8) Britain (AC members) | |
| Trevor H. Brham..... | |
| Peak 5681 m (307 Wala)... | 1 |
| H) Hindu Raj, | |
| 9) Akademische Sektion Wien, | |
| ÖAV. | |
| Albert Stamm..... | |
| Koyo Zom (6872 m)..... | 1 |
| " | 2 |
| Pechus Zom (6514 m)..... | 1 |
| 6400 m nach G. Geuber | |
| Gauthir Chish I (6225 m) | |
| | 2 |
| 6274 m nach G. Gruber | |
| Galkush Zom (6111 m)... | 1 |
| Chikar Zom nach G. | |
| Gruber | |

- Shachioch Zom (624 m) 1
 Ishporili Zom (5900 m).... 1
K) Swat Kohistan : Cabral Valley and Frontier ridge of Swat and Chitral.
 12) Britian.
 Alan Cornack.....
 P. 16300 ft (4968 m)..... 1
 P. 16600 ft (5060 m)..... 1
 P. 17800 ft (5425 m)..... 1
 P. 17300 ft (5273 m)..... 1
 P. 19262 ft (Kahari, 5871 m) 1
L) Swat Kohistan.
 13) Wolfgang Stefans Expedition.
 W. Stetan.....
 Falak Sar (5918 m) and Lower Batir Peaks.
M) Western H. K. and Nadir Shah.



A.D.
I.Y.

この地図は畏友アドルフ・デームベルガーから送って来た粗書きを書き直したものであるが、ミュンヘンのA・リンスバウアの作った一〇万の地図にも多少違う。実際にはそこへ行った雁部君が私のところへ送ってくれたのとはよく似ている。

但し最終的な結論はよく検討してから出した方がよさそうである。

×
× (吉沢)

『ブニ・ゾムの地図に就て』

グルバーは一九六五年に五六九〇m峰に登って大展望写真をとったが、そのルートはカチカニ峠、ラスブルー、バルガム、コラボルト氷河で、ズニ北峰の二登（初登は隊）、コラボルト・ゾムなどの登攀を行なっている。農大宮森君の話だと、リンゾー・ゴルの頭付近の尾根の走行が違っているらしい。

又、兵岳連の西村君はこの冬歩いている。同君の報告が出ると、冬期の状況がよくわかると思う。（吉沢）



正月の御堂平と王岳

笠原 藤 七

登山大衆で難路する山を避け、あまり人の登らない、年令相応の山を捜して、静かに自分達だけの登山を楽しむという遊樂登山に誘われて、この正月は富士周辺の山々を歩いて来た。一行は(生年順)藤島敏男、近藤恒雄、村尾金二、笠原藤七、川喜田壮太郎、望月達夫、黒柳満義、松本義夫の八名である。なお御堂平は「富士山」図幅の左下にある一、六三四・二米の峯で、王岳(一、六三三・三米)は「甲府市」図幅の中央下部にある。

昭和四十四年元旦を私共は身延門前町の田中屋旅館の三階で迎えた。早曉四時から初詣での人出で大変賑わったそうだが、私共が目覚めた頃は波が引いたあとであった。空は真青に澄み渡り、そよ風の風もない穏やかな朝である。予定の七時半には一同玄関に勢揃いしたが、元旦で車の手がうまく行かず、椿草里へ着いたのは八時半を過ぎた。身延ではこの椿草里をただ椿といっていたが、この草里は私には耳新しい地名で、注意して見ると「身延」図幅には他に室草里、板草里というのがある。焼畑に由来するものだという。

ここ椿草里は海拔四五〇米だから、一、六三四・二米の御堂平へは差し引き凡そ一、二〇〇米の登りである。ま

ず四時間老人隊のことだからおまけを見ても五時間なら大丈夫との見込みだ。部落から点線路を東へ二〇分ばかり歩いて、左の作業道に入り、登りながら左へ左へ二本の沢を越え、頂上へまともに突き上げる北高六〇〇米の大斜面の下へ出た。この斜面は一、五〇〇米くらいの高さまで林種転換(以下林転と略称)が済んだばかりで、今登って来た作業道はそのためのものだ。ここまでは地図を見ても、しわ(沢)が多いような気がして、図上にはっきりトレースすることはできない。頂上から真直ぐにこの斜面の真中に引いている沢をつめても登頂可能であるが、私共は右手の林転境のツンネを東へ直登して、頂上から南下している稜線へ出ることにした。このツンネの南は目下伐木作業が進行中で、二・五間×八間の飯場に大きく Hotel New Jubaki としゃれた名前が書いてあった。(一・一三〇)さてこの飯場を出て一と登りした頃から、いつとはなしに一門は前後二班に分れた。林転境の直登が終ると雄木林に入るが、戦後の山と違って、この木は真直ぐで横伏斜生するものがないからわけはない。稜線に出るとかすかな踏み跡があつて、やがて御堂平の平頂へ達した。元旦にこの高さで二・三センチの雪と、越後の山ではとても想像もできないことだ。東斜面は頂上まで林転が終り、一面に五、六センチの雪のからからに立ち枯れた草がぼうぼうと繁り、その中に棘のあるイチゴが混生している。この三角点に遂に出せなかった。ここから東へ尾根伝いに熊ノ森岳(一、五七四・九米)を越え、下部峠に出て猪之頭部落へ下るコースは、望さん會遊というが、峠までは道があるわけではない。時刻は既に三時を廻り、日も大分傾き、先を考えるとちょっと心細い。しばらくイチゴの棘

の中をさざり下ると、再び雄木林に入り、熊ノ森岳の頂上へ立った時は文字通り誰を彼時。林転で開けた東南方に猪之頭部落の電灯が点々と見える。その先の国道に自動車のライトの流れが絶えない。元日の夜というのに、どの何者がかくも動くのか、と思うと不思議な感じがした。が、他人が今の私共を見たら何というか。目くそ鼻くそどこの話ではあるまい、と気づくとひとり微笑を禁じ得なかった。

下部峠でやがて道を出てジグザグ道を下ると、やがて岩石が累々としたガレ沢に入った。間夜ならば当然オカンというところであるが、幸なことに、明月が皎々と照り渡り、すばらしい月夜である。下るに従って岩の下に細い水の流れ始め、水しぶきがかかった岩の表面が結氷してつるつる滑べり易く、瞬時の油断も許されない。お互に戒めの合ひ、助け合いつつの難行が続いたが、ひよいと左側に道を見つけた時は、ほっと安堵の胸をなで下した。八時五分。もう軌道に乗ったようなものは、道は歩むにやうな、もう一息と思つたのに、猪之頭部落は中々に遠く、部落へ出たのは何とよ時に近かった。電話で車を呼んで、白糸滝の麻屋泊。

二日は快晴。川さん帰津。ヤング村尾参加。今日は雨ヶ岳(一、七七一・七米)登山の予定であるが、誰一人それを口にする者はない。白糸滝を見物して、十一時頃のバスで本栖湖に行き、鳥帽子岳(一、二五七・四米)に遊ぶ。本栖旅館内。

三日、今日も快晴、気温零下一三度。余、黒柳帰津。七・三七のバスで本栖発。七・四九精進下車。縦に長い精進の部署を抜けると女坂にかかる。昔の駿州中道往還である。今は廃道とはい

え、何百年と踏み固められた道だけに、流石に勾配のとりようとい、枯草に埋もれた石積みの跡にも歴史の古さが感じられる。これを登り切ると峠で、前方に悠然と秩父連山の展望がひろげられる。ここから稜線に登山道が通じ、五湖が見える五湖山を越え、と、やがて身を没する笹やぶとなり、これをかき分けて登ること凡そ三〇分、不意に四、五人の鉄砲打ちに行き会い一休みする。鳥打ちというが、お目当は四ツ足である。厄介な奴が来たというような顔をして、間もなく笹やぶから解放され、と広葉樹の疎林が続く。この調子ではおるまに頂上へ着けるだらうという予想が、いつかは非おるまに上るという希望に朝に変わり、ヤング村尾と二人でノンストップで急ぎ、十二時ジャストに王岳の頂上に立った時はうれしかった。数年前に林転が終った東南斜面は眼をさえる何物もなく、真正面に眺める霊峯富士の眺望は神々しいばかりである。おひるを食つて、今日では一人の男が登って来た。道があるだけに、やはり、御堂平、熊ノ森とは違ふようだ。いくら人臭い。

頂上から稜線伝いの道を鍵掛峠に出て、広葉樹林の中の峠を下るとやがて沢に入り、この沢には似ても似つかぬ大げさな防災ダムの工事現場に出、その下が堰場であった。昭和四十一年九月月多の人命をのんだ土石流の惨害の跡は大方整理され、部落の中心だったと思われたあたりに立派な排水溝ができていた。そして、辛うじて被災を免れた家屋が空家のままに放置されているのが、却って鬼気迫る感じである。排水溝に沿って、数百米下に更生した新部落に着いた時(三・一四)タリミングがよく折り返し運搬の富士吉田行のバスが来たので、私共はこの

度の正月登山のハッピーエンドを喜んだのであった。そして、昔のことしか知らなかった私には、河口湖から新宿まで、国鉄の直通快速電車が通じていたのは驚きであった。

以上で一応の記録は終るが、この王岳で気づいたことである。越後でこの程度の山ならば、モチノキ、イヌツゲ、ユズリハ、ツバキ、ヒサカキ、シャクナゲ等数種類の常緑広葉樹があるのに、ここでは緑褐色に色あせたアセビラに他には常緑広葉樹は殆んど見当たらない。寒いと思われぬ雪国にその種類が多く、しかも普通暖国の植物と思われ、ツバキの種類があるのに、南のこちらでそれが見当らず、唯アセビだけというのはちょっと奇異に感じたが、これは積雪地帯では雪の下或いは雪の中に埋もれて酷寒から保護されるのに反して、無雪地帯ではむき出しに寒害にさらされるからではなからうか。又この山でちょっと厄介な奴はイバラである。少くも二種類あったが、その一種は有棘鉄線丸くからげた様な物凄しいものであった。又頂上付近で見たニシギは私には珍しかった。越後では庭木としてしか見るこのことのできないものである。(四四年四月記)

『英国陸軍の封筒』

福岡岳連のディリチ・ミール登山に関連して英国陸軍の山岳会から手紙(船便)が自署宛てに来た。仲よくやりますよと伝えて下さるという内容であるが、封筒に貼つてある宛名紙をよくみたら、この紙をはがして又この封筒を使えと印刷してあった。

私はよく封筒を裏返して使っているが、家庭の事情の悪い英国ではこういうことまでしているのかと、実は感心した訳なのである。(吉沢)

二王子岳 春山スキー登山

斎藤 桂

「滑って後悔する様な山では絶対休みません。千四百米ひと山がそっくりスキー場です。」

と新潟の藤島玄氏の添書のある下越山岳会主催、越後支部及び新発田市後援の案内状にスキー党の私共は楽しみで楽しみでならなかった。

三月二十九日早朝、新発田駅に下越山岳会の杉原八百樹氏、五十嵐篤雄氏がわざわざ迎えに来られ、市の体育館に向う。お茶ののちをのちを受け、飯豊連峯の地図及び観光のパンフレットを頂く。会員の方々の車に分乗して田員に向う。加治川の洪水のあとが痛ましが護岸工事が並行に出来つつある。今日登る二王子岳が白く高い。針立一本杉の側に車をデポして登りにかかっている人も居る。雪原を横切って杉木立の中を少しづつ登りかかる。杉の多い山だ。ぬさ滝、鳥居夫婦杉をすぎて朽ちた橋を渡ると二王子神社に着く。この社は建て直したらしく木の肌が白く新しい。社の階段に鯉人形の様に並んで中食。新潟米の五目ずしはすばらしく美味い。

一王子神社まではきつい短尾根の登りで、前者の踵、後者の鼻を蹴る様な急登を何回か繰り返して石の祠に出た。この間がここで一番きついとい登りで

「もうここまでくれば鬼の首をとったようなもの」と

と五十嵐氏が我々をほっとさせてくれる。テントか一張ある、近くの高校生のもの、こんな静かな処のテント生活も気持ちいいだろうな。

この山は木が少く白い山なみが連なっている、後で贈られた佐久間惺一氏著の二王子山麓民俗誌によれば「二王子山が入念山の頂はアオキ即ち針葉樹は立てられない山法であったため、胎内川とワケムネ（分水嶺）迄殆んど山全体は今でも数山になつていて大木はごく僅かである。」と領ける。

ふり返れば越後平野が後へ低くなつて加治川が蛇行している。さんしょう池のあたりからやと遙か稜線に緑色の点状の小屋がみえる。あぶらこぼしの急登をすぎると稜線沿いの登りとなる。飯豊連峯が一望にみえる。こんな白い飯豊はここならではみられないであらう。来てよかった。登りの疲れも忘れて一同歓声をあげる。広沢氏が雲のかからぬうちに説明してくれり。左から秩差から大日山までどしどしと眼前にせまる。ふり返れば灰色の日本海のむこうに白い頂の山なみをみせる佐度ヶ島、右の方に栗島がみえる。山頂の社は小さな木造で少しこわしかかっている。二王難小屋は鉄製の立派なカマボコ型の小屋で三角点の横にある。先発隊が雪を溶してお茶をわかしてくれた。

小屋の土間に炭火を真赤に熾してなごやかな食事が始まる。ブドウ酒、日本酒、ウイスキーなどでお酒盛が始まる。三階席、佐度おけき、などが続く。煮えたぎったみそ汁、漬物立った新潟米のご飯。あべかわ餅。夜のうたげはつきない。

ここからの新発田の夜景はきれいだ。栗島の灯台の点滅もみえる。

三月三十日。残念ながら夜強く降った雨はまだ残っている。あたり一面の霧で視界は零。朝食の納豆もちが美味い。胃ががきれてストップがかかった。もうアンコールをして丁度。今日は霧の山稜をダウンヒル・オンリー。先発は霧の中に忽ち見えなくなつてしまつた。一山そっくりのスキー場を皆は嬉々として右に左に弧をえがいて滑っていく。

昨日のテント先生が出てこられあつたおしるこをコップに一杯ごちそうになった。一王子からの降り尾根の左側の斜面を思いきり降る。膝を捻つたと私は残念ながらストックをたよりにとぼとぼ歩いて降る。霧の山稜を一人でとぼとぼ歩いて降る。登りの苦しさで見えたあたりあたりの地形や景色など充分にながめ乍らの降りにはチンパでも結構楽しい。二王子神社には満ち足りた顔で待っていた。車で体育館まで行きなごやかな中食。

重要文化財の清水園へ案内され、八十六歳とはとてもみえない波多野伝八郎氏の説明でこの庭園の説明をして頂く。そしてお茶室でお茶をたてて頂く。土蔵造りの陣列室で資料をみせて頂く。帰りの時間が迫ってゆくつり見学も出来ず、新発田城址へも行けず大変残念であった。雨の中をわざわざ駅まで送って来られ荷物もホームまで運んで頂き、いたれり尽せりのもてなしにすっかり感激してしまつた。越後の方と親しくご生活できて、心あたたまる山行でした。

この山は四月一杯は滑られるそうでの機会を期待したい。

東京からの参加者、野口末延、内海皓也、芳野菊子、渡部節子、梅野淑子、林沙千子、斎藤桂。

『インディオの登山』

E・エチニバリア教授の書いていたところによると(A.J. May, 1968)南米のインディオ達は、宗教上から又見張りの目的から、ソシニールがモン・ブランに登る二〇〇年も前に、アタカマ砂漠の六〇〇〇m級の山に登っている。面白いと思う。(I・Y)

海外ニュース

チリ通信

坂上秀太郎

出発以来御無音のまま失礼いたし、その間当隊遭難のニュースなどあり御心配をおかけしました。

当隊は昨年十一月十四日にサンチャゴに到着、諸準備に手間取り、ようやく本年一月六日から七日にかけボートで装備、食糧、人員をフイールド・エクス・マウスに揚陸、以来二カ月を費やしてパタゴニア南部大陸氷を完全に横断し三月七日全員無事アルゼンチンのタリスチナ牧場に到着致しました。

途中二月十六日リン・パトロン(三〇一メートル)の初登攀も行ないました。出発が大変遅れたとはいえ、ほぼ計画通りエクスパディションを終わつたのですが何しろ前人未踏のルートで二月十九日から二十八日まで猛風雪にあい、テント、装備ともに三メートルの雪に埋められ、ようやく食糧を掘り出し、装備の大半を放棄、窮地を脱し、予備日程を完全に使い果たしました。

そのため当隊との連絡に当たっていたチリのベアマエチャ氏が心配され三月六日にチリ空軍に問い合わせたのがこの発端で、騒ぎになったようです。それに氏の心配に輪をかけたのが二月八日にチリからアルゼンチンに抜けた長野県隊の隊をチリ側が誤認したことにあるようです。

当隊はそういうことは露知らず七日にタリスチナに着き直ちに無電で下山を発信しようとしたのですが、マスタース氏の都合で翌八日になってしまいました。ところが八日、九日は土、日曜でして宛先のブエノスアイレスの

日本大使館および時事通信社では十日にようやく届いたようです。以上のような手違いがさきわざのもですが、何としても人々に迷惑をかけたことに違いなく、この点おわび申し上げます。小生は一足先に三月二十七日に東京に帰り、すぐ外務省、チリ大使館、アルゼンチン大使館へ挨拶に廻り二十八日神戸に帰着しました。

(三月二十九日 山崎宛)

アフガン便り

広大 平井 剛

先生には益々御清祥の御事と拝察申し上げます。今夏の広大アフガニスタン学術調査隊の予備交渉に、二月二日來アフガン当局と接渉しておりますが、私達の感覚では理解が難しいことも多く難行しております。

唯、大使館の方や在留邦人、殊に江南の高田様の御尽力により、事実上の外務大臣といわれるDr. Farhadiに会見出来、中部アフガンの総合的調査と、ノシヤック近辺への登山活動が認められる可能性が強くなりました。これを確実にするため、もう少し滞在する予定です。

尚、食糧品や薬品など二年前とは大部異なつて、われわれの必要なものは殆んど購入出来る。文具類など共に、内地より運ぶのより、現地調達の方がずっと安くつきます。唯、フィルムは高く、一・八倍近くの値段です。先ずは近況御報告まで。末筆乍ら先生の益々御健勝のほど祈り上げます。アフガニスタン、カブールにて

一九六九・三・一五 (吉沢宛)

ダウラキリーの遭難事件について、情報は来次第御知らせする。(Y)



カナダ山岳会のこと

バンクーバー支部幹事

W.C.レディンガム

私(吉沢)がシアトルからバンクーバーへ移ったのは、一九六八年一月四日であったが、その翌日の夜下宿住まいに、ACCのバンクーバー支部の年次総会が、Vancouver Mariners Hallで開かれることになっていることがわかった。

私をそこへ車で案内してくれたのは、ACCの元老 Mrs. Phillips Munday 女史と Mr. Paddy Sherman であつたが、私を皆に紹介し、一席ぶてと言ったのは後者であつた。

彼は新聞界でもその健筆で名を知られているが、ACCでも最右翼に属する活動的な登山家である。彼には、雲上を行く人々 (Cloud Walkers) という名著がある。生れは一九二八年三月一日だから、現在はまだ四一歳の働らき盛りである。

ペンデー女史は有名な、故 Walter Alfred Don Munday 氏の夫人で、ウォーディングトン峰の直ぐそばにある、マンデー峰は彼の名をつけたものである。だからもし、マンデーの名を知らないままでは、カナダの山を語る資格は

ない、ということになる。

ス・マンデー女史はカナディアアン・ロッキーズにあるロブソン峰の、女性としての初登攀者、これだけで大体の様子はわかうというもの。

私の判取帳にはその署名とともに、23/9/69と書いてある。これは一九六九年九月二日生れという意味では勿論ない。23/9まで書いて、あの年号を忘れてしまったものだから、その時の年令を書いたもの。差引きすれば丁度一九〇〇年、三田さんやフリッツ・ウィースナーと同じ年だ。私よりも三つ上のお姉さんということになる。

とても長い脚の持ち主で、すんなりと背が高く、髪は真白い堂々たる女流登山家である。つまらない形容をつけ加えるよりも、ただ、立派なものだ、とだけ言えば充分であらう。

この女史からこの間手紙が来たが、それには、「私はCAJの編集をやっているが、ウォーディングトンへ登りに来た日本隊について詳しく知らせて下さい、と書いてあった。私がその依頼に応じて即座に書き送ったことはいうまでもない。その前に送った「山溪」のカラ・ブック二冊のことはとても喜んでいて。

さて、次の現状報告は、シャーマンの依頼で、支部の幹事、レディンガム氏から送って来たものである。

ACCにはカナダその他の都市に支部があります。

Vancouver } British Columbia

Victoria }

Calgary } Alberta

Edmonton }

Winnipeg } Manitoba

Ottawa } Ontario

Toronto }

Montreal } Quebec

New York } Eastern U.S. section

Chicago } Mid-West U.S. section

Portland } Western U.S. section

ACCの主な活動は、スキーと夏季登山キャンピングです。春のスキー・キャンプは復活祭の休日期間(三月二日以後)中に、会の小屋の一つを中心にして行なわれます。一方夏季登山キャンプは、ロッキーズ、Selkirk、Purcell、海岸山脈などの適当な場所で行なわれますが、それは「キャンプ場委員会」によって決定されます。

一九六九年には経験者を対象にした小キャンプが、六月下旬に、海岸山脈のウォーディングトン峰周辺で開催され、いつもの夏季キャンプは、七月二日と二六日まで、バンフ国立公園の北部ロッキーズの Freshfield 地域で開かれることになっています。

今日現在でACCの会員は、二九一名になっています。

Canadian Alpine Journal は一九〇七年に継続的に発行されておられ、カナダにおける登山の記録を掲載しております。(注・ACCの創立は一九〇六年、法人組織化は一九〇九年、英国山岳会と同国婦人山岳会と提携している)

一九六八—一九七〇年の役員
幹事 Philip J. Dowling

英語部幹事 Richard S. Thomson

西部部幹事 E.M. Mills

西部部幹事 W.P. Broda

理事 David R. Fisher

Scipio Merler

ここに入会申込書と一枚同封しましたが、その裏を御覧になると、入会金その他の経費並びに、会員としての必要事項がおわかりになります。(注・それによると、会員は正会員と準会員(Associate Members)に分れ、入会金も年会費もそれぞれに違っています。正会員(Active Members)の会費は、普通、入会金が一〇ドル(カナダのドルは三三三三円)、年会費が一五ドル。合計二五ドルということではACCと同じであるが、カナダの方は在外会員費を特に一〇ドルとしている。その他細かいことは別の機会に譲る。

尚、ここ数年間、ACCはその夏季登山キャンプに日本の登山家の来訪を受けていますが、こうした人々にわれわれがカナダの山を御紹介出来たことを大変嬉しく思っております。

一九六四年には早稲田大学から六人の女性登山家が、南ロッキーズで開かれた「French Military Group」のキャンプに参加されましたが、われわれは彼女らがこの経験を大変楽しめたことをよく知っております。

最後に、私がお送りした情報に貴殿が興味を持たれ、且それが貴殿のお求めになったものから外れていないことを信じております。

貴会の方々が、一九六九年にも又よい登山を愉しまれることを祈りながら、この御連絡を終らうと思ひます。(一月七日付)

追って、私は一九六九年二月二日付で、アメリカ山岳会の会員にな

ったことをお知らせしておきます。(吉沢)

☆一九六九年の

中部H・K及び

ワハン情報

チュービングン大学の悠たりした研究室で勉強しているウォルフガン・フレイから便りが来た。

私は今、試験のための準備をしています。博士号への仕事も終りましたから、この六月には頭の痛い学習から放れることが出来るでしょう。

昨年は意外に禁断のワハンへ入った隊が多かったが、今年も幾つかあるようだ。大体次の様になっている。

Walhan:

- 1) CAI (Como 支部)
- 2) France (J.P. Paris)
- 3) (M. Gravost)

Bandako の乗艦も組う

中絶 H.K.

- 1) Britain (Newcastle 大学)
- 2) Spain (Barcelona)

P. 5907, これは昨年の夏知野院大に私が乗めた山である。やはり組うとみえる

- 3) USA (California)

東部から Marcheb.

- 4) Britain (J. Payne)

Munjan の東部。

- 5) USA (J.R. Hecht)

Chitral or Bandako

- 6) Österreich (Dr. Rankl)

Koh-e-Ghas & Iblar

最後にフレイが付け加えているところによると、今年のワハンはもっと多くなりそうだが、それらが中部H・Kに転向する可能性も多いという。

スイス山岳会の現況

アルバート・エクラ

UIAAのロンドン会議で私はスイス山岳会のアルバート・エクラに会ったが、ユーストン停車場からノース・ウエールズへ行く列車の中では、私の前に偶然腰かけた彼と長い時間の間、いろいろと山の話話し合った。

彼が私の「Mountaineers Met」に書いてくれたところによると、生れは一九一三年の六月一日、私より一〇歳下になることがわかった。

彼は言うまでもなく、一九五六年のスイス・エベレスト隊の隊長であり、その時のことを書いた「Gipfel über den Wolken」の著者でもある。この本には邦訳があると言ったら、それは初耳だ、是非送って欲しいだったので、私は帰国後、「あかね書房」の新島君（元の明文堂の息子）に探してもらって送った。エクラがこれを受取って喜んでくれたことは言うまでもない。

私はそれを送る序でに、彼が元会長をやっていたSACの現状を知らせてくれと書いておいたら、次のような返事が来たので何かの御参考になると思って御紹介することにした。

◇（吉沢記）

SACは一八六三年の創立。会員は現在五〇、〇〇〇人。九三の支部に分れています。所有山小屋は一四〇、アルプス及び準アルプスにあって、一年中誰にでも解放されています。会員は他の人より安く使え、且優先権をもっています。小屋の維持、管理費は年間、一〇〇万フラン（八三〇〇万円）にな

ります。

SACは機関誌として「Die Alpen」（ドイツ語）「Les Alpes」（フランス語）を毎月出しています。

会員の登山事故に対する財政的危険の一部は会費で負担し（生命保険のこと）、救助費は大部分が支払います。中央委員会は登山指導者の訓練をする責任をもっています。（職業的案内者は各州政府によって組織され、管理されています）。又、救助隊員の訓練と装備品の整備もこの中央委員会の仕事で、現在九〇カ所以上の救助基地をもっています。

中央委員会は時々、山岳芸術の展覧会を催し、又、風景保存のことに關心を示しています。各支部は山小屋の経営に当り、その支部員のために訓練課程を用意したり、登山旅行を計画します。多くの支部では毎月会合を開くとともに、当面の諸問題に関する講演会を準備しております。（一月二〇日付）

オーストリア山岳協会と
オーストリア山岳会の区
別について

：エーリッヒ・バーニス
からの手紙より：

吉沢 一郎

（一九六九年三月一日、ウィーン）
一月二七日付のお手紙と美しい写真有難うございました。とても嬉しく思いました。

今週私はミュンヘンに赴き、そこで講演を二回やり、序でにDAVのG・ハウザーを訪ねて来ました。あなたと彼とシュタイアの町を歩いたことを覚えていて欲しい。

三月の末に私は二、三の友人とホーエン・アトラス山脈へ入るためにモロ

ッコへ行く予定です。スキーを持っていきますが、北アフリカで滑るのは嬉しいことと思っています。

あなたは「Der Österreichische Alpenverein (ÖAV) v. Der Österreichische Alpenklub (ÖAK)」の違いをお訊ねになって来ましたが、それをここで答えたいと思います。

（一）は、山に興味をもっている人なら誰でも入会出来る大きな会であります。従って何千人という会員をもっています。

オーストリアにはこの他にも多数の会員をもつ、大きな会がいくつあります。その一つに、左翼的な傾向をもつ「自然の友・旅行者協会（Touristenverein-Die Naturfreunde, 略してTVN）」と、又、会員二〇、〇〇〇をもつ、比較的小さな、そして政治的色彩のない「オーストリア旅行者の会（Österreichische Touristenklub (ÖTK)）」というのがあります。

この三つの大きな会の中にも、比較的に数は少ないが、鋭敏な登山家が何人かいることは勿論です。

（二）は、厳密に、高峻山岳を目標とする会で、ここへは過去において、特別な登山の実績をもっている者だけしか入会出来ません。前記の会に所属する最優秀な登山家は、大概（の）の会員になっておられます。

その上に、ヨーロッパやアメリカ、ソ連等の一流登山家も、この会員になつていて多いようです。日本の優れた登山家も、われわれの仲間になれると思います。

われわれの会の活動についてちょっと例をあげるならば、世界の八〇〇〇m峰一四座のうち、六峰はÖAKの会員によって登られておられます。

御質問への答えは以上の通りであります。最後に再び、あなたのお送り

下さったお手紙と、芸術味豊かな、アルバイン・カレンダー（Alpin-Jahrbücher）とある）二冊に対し、厚く御礼申し上げます。

Herzliche Grüße,
Ihr stets ergebener
Erich Vanis

（尚、バーニスについてはいずれどこかで紹介しようと思っています。）

「潜り登山」

ジョン・アレン

BMCのニート君に頼んだら住所がわかったので私は、昨年カラコラムのマルビティン峰に挑んだJohn T.H. Allen隊長へ手紙を出した。それへの返事が次のものである。（吉沢）

お手紙有難うございました。又、われわれのカラコラム遠行隊への御関心並びに遭難者B・リブリーに対するお弔みを頂いたことについても感謝しておりました。近く彼の御両親に会いましてお知らせしてお伝えします。われわれの遠行隊の報告については、四月中旬までお待ち願えればと思います。報告書の原稿は目下印刷所に行っています。それは写真も略図も入っております。出来れば早速一部お送りしましょう。

それはそれとしてわれわれは、一九六七年の六月に、ロンドンに及ぶ入るパキスタンに出発し、五週間に及ぶ登山関係の申請書を提出しました。許可証がやっと入手出来たのは一年後、われわれが英国を出発する五週間前のことでした。

しかしわれわれは免に角、六月一日（一九六八年）という丁度いい時に出発することが出来た。われわれはマルビティン（七四五三m）の北側からの申請をしたのですがそれは許され

ず、インダス河のサッスリ（Sassili）經由で南側からの接近を認められました。南側は急峻であることを知っていましたがどうにもなりません。結局（？）から不愉快な報道を耳にしました。三人のオーストリア人が、八月十七日に潜りでミナビン（Daylan, Minapin, Diran, 7273m）峰に登ったというのです。

（注：これはHans Schell隊である）彼らは登山隊としてでなく、旅行者（ツーリスト）としてミナビン村に着し、われわれが考えていたと同じルートで登頂してしまいました。われわれの最初の申請書にはミナビンが入っていたのですが、拒絶されました。こうなると、公式規制があっても、それを上手に誤用化せば、ツーリストとして入り、旨いところへ集まって軽登山隊を組織することが可能のように思えます。われわれはバキスタン人に対し正々堂々とやることで可能な苦勞をして来たので、これを知って全く当惑したという訳であります。私は最近、オーストリアのその登山家に手紙を出しました。

われわれは又、多分四人からなる日本隊のいたことも耳にしました。その人達はやはりサッスリからわれわれのBCの方へやって来ました。しかし彼らは単に偵察だけだったので、規制を犯しているとは思いませんでした。

われわれには許可を得た上に、病氣、重大な事故、そしてマルビティンの頂上へ登れなかったという二重三重の不運があったので、出掛ける前と登山中に、総ての忍ばなければならなかった迷惑と悲痛を受けたあとでは、非公式の接近を強く不満としているので、あの日本人だけは正々堂々と動いているものであることを心から願っているものなのであります。

（吉沢一郎宛）（二月二三日付）



常務評議員会議事

期日 昭和四十四年三月十九日 国際文化会館に於て四十四年度評議員選出の件

出席者 松方三郎(特別出席)、島田巽、佐藤久一、沼倉寛二郎、各常務評議員、望月達夫評議員、大塚常務理事(委任出席者)、渡辺公平、加藤泰安、石原憲治、(欠席) 中屋健次

沼倉常務評議員より詳細に説明があり、常務理事会案と追加案に対し意見が述べられ、各員これに賛成、承認された。



新刊図書受入報告(昭・44・3)

- 桜門山岳会寄贈
(1)『雲表の友』昭・44・3
富山県教職員山岳研究会寄贈
(1)『北ボルネオ踏査隊報告書』昭・44・3
- 深田久弥氏寄贈
(1)深田久弥著『ヒマラヤ登攀史 第二版』昭・44・1 岩波書店刊
山村民俗の会寄贈
(1)『会員名簿 44年版』
村井米子氏寄贈
(1)『ユース・ホステル ハンドブック '69』昭・44・1 日本ユース・ホステル協会刊
小林義正氏寄贈
(1)東京天文台編『理科年表 昭和四十

Journal Arrived in March 1969

1. Alpinismus. 7 Jahrg. 2. Februar '69
2. Der Bergsteiger. 36 Jahrg. Heft 1-2. Januar-Februar '69
3. Deutscher Alpenverein. 21 Jahrg. Heft 1. Januar '69
4. Mountain. No. 1 January '69
5. The Nepalese Perspective. Vol. V, No. 24. March '69
6. Österreichische Alpenzeitung. 86 Jahrg. Folge 1362. Nov./Dez. '68
7. Rivista mensile. Anno 89 N. 11-12. Nov.-Dic. '68

四年'昭・43・12 丸善株式会社刊
永原輝雄氏寄贈
(1)『安ちゃんを偲びて』昭・44・3
横浜山岳会刊
定期刊物受入報告(昭44・3)
(部報・会報類)

- 1 『あしなみ』第43年6号(113) 44-2
- 2 『地図』Vol. 6, no. 4 (24) 44-4
- 3 『兵庫山岳』No. 23 69-3
- 4 『国立公園』No. 231/232 69-2/3
- 5 『京都山岳』第504号 no. 3 (526) 69-3
- 6 『名古屋山岳会月報』No. 15-16 68-12, '69-1
- 7 『OMC』No. 232 69-3
- 8 『山嶺』No. 467 44-3
- 9 『自然保護』No. 81-82 69-2-3
- 10 『低山』Vol. 8, no. 45 69-3
- 11 『山と雪』No. 131 44-3 (山岳雑誌)
- 1 『アルピニスト』V. 3, No. 1 (6) 69-3
- 2 『アルプ』No. 133 69-3
- 3 『岳人』No. 261 69-4
- 4 『HIKER』No. 162 69-4
- 5 『山と溪谷』No. 367 69-4

図書紹介



コンウェイ著 吉沢一郎訳
『カラコルムの夜明け』
— ヒマラヤ名著全集⑨ —

周知の通りコンウェイの Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalayas は、数あるカラコルムの文獻には常に例外なく列挙される、所謂古典的書物である。併しなからロイヤル・オクタワー・ヴォル七〇九頁の、文字通り浩繁な書物であり、更に折込み地図を納めた別巻が添付され、しかも今日では稀覯の部に属するもので、これを完全に読み通した人は、現代の日本では余りいないのではなからうか。従って、この度吉沢氏の邦訳が完成されたことは、この点だけでも意義が大いし、喜ばしいことである。私も正直に云って、この吉沢訳によって初めて通読し得たのであった。

翻訳と云ってもA5判四八二頁、8ポイント二段組、原稿用紙にして二〇〇枚を超えた云々は、邦文で読むにしても一日や二日というわけにはゆかない。まして翻訳となれば、その努力たや想像に余りある。訳者の努力と根気とに対して深く敬意を表する所似である。

原書は既に八十年近くも前の紀行であるから、その叙述も古風であり、かなり冗漫の感をまねだぬが、欧州アルプスで経験を積んだ当時の卓越した登山者によって、初めて綴られたこの

古典を、読者は謙虚に通読して、得るところをつかんで欲しい。訳文ははなめらから読み易く、本文中には図版(マコミックの絵)がふんだんに挿入されていて、ともすれば乾燥に陥り易いのを補っている。解説も、例によって充分読者の理解を助けるのに役立っている。

記者吉沢氏は、今から三十年位前、K・メイソンの「カラコラム・ノーマンクレチャー」が発表された当時から、カラコルムの研究に多くの時間をさいて来た人であるから、この古典の訳者として最も適任者と思うのであるが、しかも私としては一言したいことがなくてはならぬ。

その一は、書名の『カラコルムの夜明け』であるが、これは原書を完訳した以上、矢張り原名通り『カラコラマ・ヒマラヤの登山と探検』としてほしかったと思う。

つぎに、カラコラム(Karakoram)を敢てカラコルム(Karakorum)としたことも、吉沢氏自身の文章ならともかく、コンウェイの訳である以上、カラコラムとすべきが至当であったと思う。現在では、カラコラムよりカラコルムを用いる方が一般的のようだが、依然としてカラコラムを使用する権威者がなくはない(例えばメイソン)。この点について、私は曾て一文を草したので茲には繰説しない(深田久弥氏の『ヒマラヤの高峰』第四巻附録)。A Jの編者の意見では、両者夫々に立論の根拠があり、現在のところどちらが正しいとも定め難いので、A Jでは筆者の書くのに従って両方を認めることとした。私も目下のところ、その扱い方が一番妥当のように思う。

その後、あらたにカラコルムが正しいという説の出したのを、私は寡聞にして知らない。吉沢氏が敢てカラコラマをしりぞけ、カラコルムを採用したことは、遺憾ながら解説中にも一言もふれていないのである。吉沢氏はおそらくこれらの事情にも、よく通読しておられた筈なのに、この点を解説し、カラコルムを採用した確たる理由を示して頂きたかったと思う。因みに本書巻末に添付されている三色刷の折込み地図は、いささか皮肉にもカラコラムとなっている。

以上、私の卒直な所感を述べたが、わが国での翻訳文獻中最も大冊であった本訳書の完成に際し、訳者の為に変更を教意を表したい。(一九六八年一〇月五日、あかね書房刊、価二五〇〇円)

本訳書が刊行されてから、既に半年に乘んとするが、その読後感らしいものも本誌上には一向現れないので、私は大阪の旅舎で稿を綴った。近來多忙で落ちついた暇が得にくくからである。英米の山岳書の新刊は最近少ないようだが、わが国では山の著書共かなり盛んに刊行を見る。時々JACライブラリーの新刊書冊をのぞいても、目新しい本が一、二冊は来ており、本会員の手になるか、本会員が関係しているものも少なくない。とすれば、本誌の書評欄に採り上げるのが、寄贈者に対する礼儀でもあるし、会員読者に対してもサービスであろう。無論、中には黙殺してもいいようなものも少なくはない。

年々海外へ出かける登山者は、会員の中からも増える一方だが、本誌の書評欄の執筆者をみると、余り新顔が現われてこないし、書評欄そのものもやや衰微の傾向にあるようだ。現役の理事諸君や図書委員諸君の一考をわずらわしたい。まさか、山へさへ登っていない……という意見はあるまい。冒頭の本に直接関係はないことだが、この序でにいささか思うところを書き添えた。(望月達夫)

ルーム日誌(44・3)

1日(土) 名誉会員松方三郎氏ネパール訪問報告会
 秩父宮妃殿下の来室あり
 5日(水) エベレストについて打合せ
 6日(木) 定例理事評議員会
 11日(火) 海外連絡委員会
 13日(木) 桜門山岳会集会
 18日(火) エベレスト委員会(第一回)
 自然保護委員会
 19日(水) 第二五〇回小集会「ヒンズーの山々」雁部貞夫氏
 20日(木) 日本山書の会総会
 24日(月) 常務理事会
 25日(火) 臨時理事評議員会
 29日(土) 故磯野氏を偲ぶ会
 三月中来室者 三七〇名

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金 600 円也
 送 料 別 受 け 金 120 円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15, 電話(943) 0311 (代表)
 大阪店・都島区相生町7, 電話(352) 3491 (代表)
 名古屋店・昭和区雪見町1~15, 電話(731) 7331 (代表)
 工場: 大阪工場(堺市), 東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
 日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

「山」編集委員

昭和四十三年度

編集代表 山崎安治
 委員 吉沢一郎 坂本矩一 松田雄一 倉知全
 担当理事 小方弘

昭和四十四年五月十日発行

東京都千代田区神田錦町
 三二三 向井ビル
 発行所 社団法人 日本山岳会
 編集代表 山崎安治
 (233) 七四四一

振替口座東京四八二九番
 東京都港区赤坂一丁目三番六号
 印刷所 株式会社 技報堂